友達

 　　Puney　Loran Seapon

　私の名前は、。

　こんな男みたいな名前ですが、私は女です。本当は『』という名前になるはずが、こんな名前になってしまいました。私が生まれて、両親はよほど興奮したみたい。男の子が生まれたら『響一郎』って名前にする予定だったせいか、出生届けに、名前を間違って記入してしまったそうです。なので、親は私の事を『響香』って呼びます。

　でも、この男みたいな名前のせいで、小さい頃、よくからかわれたりもしました。なので、私は極力、人にこの名前を知られないよう、目立たないように生きてきたつもりです。これで、嫌な思いをしない。私は、そう思っていました。

　しかし、思わぬ落とし穴が、私を待っていました。

　地元の中学校に入学してすぐのことだと思います。どんどん周りの子達が、いわゆる『グループ』と呼ばれるものを作っていく中で、私だけが『グループ』を作ることができず、クラスで孤立していることに、私は気がつきました。目立たないように生きてきたので、どうやらコミュニケーションを取るのが下手になってしまったようです。

　孤立がいじめへと発展するのに、そう時間はかかりませんでした。

　最初は無視されることから始まり、無視は陰口へ。そしてそれは、靴や教科書を隠されることへと変わっていったのです。急速に、突然に、まるで揚げたての天ぷらが、すぐにしなってしまうように。孤立していた私は、いじめのいいスケープゴートだったのでしょう。

　中学校の三年間を、私はいじめられて過ごしました。暴力を振るわれることこそなかったものの、自分の名前をネタに陰口を叩かれることは、タンスの角に小指をぶつけるのと同じくらい辛いことでした。こうならないよう、今まで努力してきたのに、結果として、自分のやってきたことは、全て無駄なことだったのです。

　成績は悪い方ではありませんでしたが、いじめが辛いのもあって、この学校の誰も行かないような偏差値の低い高校に、私は進学しました。とにかく、逃げたかったのです。いじめから、そして自分の名前を知られてしまったことから。

　でも、何も変わりませんでした。入学初日、クラスでの自己紹介で、ある男子生徒が吹き出したのがきっかけで、クラスメート全員が大爆笑。入学しばらくは『いじり』だったように思いますが、徐々に自分がクラスで孤立していくのが分かりました。それがいじめへと発展していくことも容易に想像がつき、そしてそれが現実となったことに、私は愕然としたのです。無視され、陰口を叩かれることはもちろんのこと、中学校の頃のいじめではなかった、暴力や恐喝も加わり、挙句の果てには強姦もされて、私は学校に行くことに恐怖を覚えるようになったのです。男子生徒のほとんどがタバコを隠れて吸っていたので、男子に絡まれたときは、私の腕や足にタバコを押し付けられることもあり、男子が怖くなりました。

親も先生も、いじめられているのは、自分のコミュニケーション能力に問題があるからだと言い張って味方になってくれないので、私は不登校になることさえ許されず、地獄の半年間を過ごしたのではないかと思います。

夏休みが明けて、新学期が始まる頃。私は自分の体に残る、いくつかの醜いアザやタバコの痕、目の下にくっきり残るクマを見て、そしておそらくはあるであろう十円ハゲを想像し、黒く、悲しい感情に支配されました。そして私はいよいよ、学校に行くことと、自分の人生を、今日で最後にしようと思ったのです。

そんな、ある日のことです。

夏が終わったとはいえ、まだ残暑が厳しい九月。私の学校は私服で登校することが許されているので、生徒のほとんどは半袖で登校してきます。醜いアザやタバコの痕を見られたくないので、私は長袖で登校しました。お昼休み、汗で腕にべったり張り付く袖が鬱陶しく、暑さで頭も朦朧とする中、私はハンカチが廊下に落ちているのを見つけました。おそらく今、目の前を歩いている女子生徒が落としたのでしょう。とても可愛い花柄のハンカチでした。

人と関わりたくないので、普段なら放っておくのですが、今はなぜか、そのハンカチを拾いました。そして、周りにたくさんの生徒がいる中、光に引き寄せられる虫のごとく、私はその女子生徒に話しかけたのです。

「あっ……あのっ……このハンカチ、おっ……落としました？」

　緊張しているのか、スラスラと文章が出てきませんでしたが、話しかけたことは彼女に伝わったようです。彼女は、こちらを振り向きました。隣のクラスの子です。

「……」

　彼女は私を見て、固まりました。私の目を、じっと見つめています。こんな反応は初めてです。てっきり無視されるか、舌打ちされるか、今差し出しているハンカチをひったくられるかのどれかだと思いましたが。

「あっ……こっ……これっ！」

　周りでクスクスと笑い声が漏れる中、私は手に持ったハンカチを彼女に突き出しました。多分、意図が相手に伝わっていなかったのだろうと思ったのですが、どうやらそうでもなさそうです。相変わらず彼女は、私の目をじっと見つめていました。私も釣られて彼女の目をじっと見つめ、まるで時が止まってしまったかのようでした

「……ありがとう」

　彼女はそう呟いて、なぜか逃げるように走り去りました。

　そして放課後。

　誰かに目を付けられる前に、さっさと帰ろうと生徒玄関を出た時です。午前放課の日だったので、と照る太陽の眩しい中、

「あのぅ、すみません」

　誰かが私に話しかけてきました。声が聞こえた方に目をやると、そこには、お昼休みにハンカチを落とした子が立っていました。お昼休みの時は気づきませんでしたが、よく見れば、なかなか可愛らしい子です。少し天パった黒髪に、とろんとしているけど大きめの猫目。背は私と大差はなく、ファッションも上品です。まさに清純派美人と言ったところでしょうか。

「ハンカチ、わざわざありがとうございました」

　彼女は私に近づいてきて、頭を下げました。その瞬間、ふと、オトメユリの甘く濃厚な香りがしました。まさか、お礼を言うために、わざわざ……？

「あっ……いやっ……別に……」

　突然の出来事に、私はつっかえながら、そう返しました。今までの経験から、これは何かあるぞと、私の勘がそう言っています。

「本当にありがとうございました。これ、すごく大切なものなんです」

　……どうやら、本当にお礼を言いに来ただけのようです。嬉しそうに、頬を朱に染め、顔を輝かせてそんなことを言う彼女からは、何の悪意も感じませんでした。

「私、って言います」

「きょう……か？」

「はい。『響く花』って書いて、響花って読みます。……あの、どうかしましたか？」

　偶然、自分が付けられるはずだった名前と同じ読みの名前を聞いて、それ以上声が出なくなっていた私を、響花は不思議そうに見つめました。

「あっ……いや、何にも……」

　ようやく出た声は、少し掠れていました。

「あの、よろしければ、お名前を教えていただけませんか？」

　響花にそう聞かれて、私は返答につまりました。教えたくないという気持ちもありましたが、響花になら教えても不快な思いはしないような気もします。

「須藤響一郎……っていいます」

　意を決して、私は自分の名前を名乗りました。よく考えれば、私は今日で、自分の人生を終わらせる予定だったのです。不快な思いをしたところで、どうってことはない。私は、そう思いました。

「響一郎……？」

　響花は、首を傾けました。おそらく、聞き間違えたのだと、彼女は思ったのでしょう。できればスルーして欲しかったのですが、笑われたりしないだけ、まだマシな方です。

「……本当は、字は『響く』『香り』って書くけど、読みはあなたと同じ響香って名前になるはずだったんだけど……」

　暑さのせいなのか、人生がもうすぐ終わるせいなのか、頭がおかしくなっていたようです。私はふと、そんなことを呟きました。こんな話、中学生になった頃から誰にも話さなかったのに……。

　私の呟きが聞こえなかったのか、彼女は何の反応も返しません。ただ、黙って首を傾け、不思議そうにしていました。

「……それじゃあ」

　私はそう言って、帰路につこうとした時です。

「あの、帰り道、そっちなんですか？　私もそっちなので、もしよかったら、一緒に帰りませんか？」

　響花が不意に、そんなことを言いました。本当はさっさと帰りたかったのですが、何分、こんなことを言われた経験は中学生になった頃からほとんど無く、断るための言い訳もすぐには思いつかなかった私は、つい首を縦に振ってしまいました。

　一緒に帰ろうと言っておきながら、帰り道、響花は何かと理由をつけて、私をいろいろなところへ連れ回しました。喫茶店やブティック、雑貨屋さんやアニメショップ。他にも色々なお店へ連れて行かれた気がします。でも、不思議と嫌な気はしませんでした。生まれて初めて、親以外の人とショッピングを楽しんだ気がします。響花は私のことを無理に詮索せず、それが私にとって、すごく心地よく思えました。もしかすると響花は、私が今日で自分の人生を終わらせるつもりであることに気づいていたのかもしれません。

「今日はありがとう、天瀬さん」

　家につく頃には、日が落ちかけていて、空が朱に染まってとても綺麗でした。自分の人生を終わらせる予定でしたが、今はもうどうでもいいように思えます。響花は、首を横に振りました。

「響花って呼んで。私の方こそ、わがままに付き合ってくれてありがとう。すごく楽しかった。私たち、気が合うのかな？」

　そう言って笑う響花が、私にはただただ眩しかった気がします。

「じゃあね。また明日。『響香』ちゃん！」

　一瞬、私は聞き間違えたかと思いましたが、自分の耳が正常であることに気がついたときにはもう、響花ちゃんの姿は見えなくなっていました。もしかすると、中学校以来初めて、私に友達ができたのかもしれません。友達がいなかった私には、友情を確信できませんでしたが、とても暖かな気持ちになったのです。

　次の日から、私は響花ちゃんと、授業の時以外はいつも一緒にいるようになりました。響花は決して、私のことを本名でよばずに『響香』って呼んでくれて、響花と私は不思議と話が合い、一緒にいるだけで、晴れやかで楽しい気分になったのです

「あれ、響花ちゃん、もしかしてシャンプー変えた？」

　ある日、昨日まではオトメユリの香りだったのが、ライラックの甘い香りに変わっていることに気づき、私はそう聞きました。

「あっ、気づいてくれた？　最近、シャンプー作るのにはまっているんだ。これは、ライラックの花で作ったの」

「シャンプーって、作れるんだ！　知らなかった」

「へへへ、今度、教えてあげよっか？」

「本当？　じゃあ今度教えて……って、うわっ！　もうこんな時間。次の数学の授業遅れちゃう！　急がないと！」

「えー、もっと話そうよ。響香ちゃんの次の授業って、確かセクハラしてくる先生が担当でしょ？　私、次の授業の担当の先生苦手だから、一緒にサボらない？」

　憂鬱そうに響花ちゃんがそう言いましたが、私は首を横に振りました。

「だーめ！　授業をサボるわけにはいかないって！　確かにあの先生、ちょっと女子にセクハラするって噂だけど、私はまだ一度もされたことないし、多分大丈夫だよ。……それじゃ、また次の休み時間に！」

　まだ何か言いたそうな響花ちゃんでしたが、そんな響花ちゃんを残して、私は教室に戻りました。

　結局、それからその日はずっと、響花ちゃんは沈んだように暗い表情で、私は申し訳ない気分でいっぱいになったのです。

　次の日、響花ちゃんのシャンプーは、ライラックの香りからラケナリアの香りに変わっていました。

　そんな日もありましたが、それはそれで、後から思えばいい思い出になったのではないかと思います。響花ちゃんと過ごした日々は、私の人生に潤いと喜びをもたらしてくれました。

　ですが、重要なことを、私は忘れていました。響花ちゃんと友達になったからといって、私に対するいじめがなくなった訳ではなかったのです。

　確かに響花ちゃんと一緒に過ごすようになってからは私へのいじめはかなり減りました。今までみたいに、一人でいることがあまりなかったからでしょう。少なくとも、恐喝や強姦はなくなったと思います。でも、完全になくなっていた訳ではなかったのです。

　ある日のことです。放課後いつものように、響花ちゃんとおしゃべりしながら生徒玄関まで来た時のことです。私が自分の下駄箱を覗くと、自分の靴がないことに気がつきました。

「あれっ……？　響香ちゃん、靴どうしたの……？」

「……多分、どっかに隠されたんだと思う」

「えっ……？」

　その時、私は響花ちゃんの顔を見ることができませんでしたが、声の様子から、響花ちゃんがひどく悲しそうな表情をしていることは想像できました。あまり心配をかけたくなかったので、私は響花ちゃんに、自分がいじめられていることについては何も話していませんでした。

「響花ちゃん、実は……」

　意を決して、私は自分がいじめられていることを、響花ちゃんに話すことにしました。

「……どうして、話してくれなかったの？」

　全部話した時、怒ったような、それでいてショックを受けたような、そんな顔で響花ちゃんは呟きました。

「私、響香ちゃん以外の人とはあまり話したことないけど……。そういえば、いろんな人が響香ちゃんの悪口言ってた……。そっか、そうだったんだ……」

　他にも何か呟きながら、響花ちゃんの目には涙が溢れていました。

「ごめん……響香ちゃんが苦しんでいること、気づいてあげられなくて……」

　そう言って響花ちゃんは私を抱きしめてきて、私は何も言えず、ただその場に突っ立っていることしかできませんでした。でも、その言葉を聞いた時、暗くなっていた私の心が、少し晴れやかになったように感じたのです。

　結局、靴はゴミ箱の中から見つかり、無事私と響花ちゃんは帰路につくことができました。その途中、

「そういえば、靴を隠した人に心当たりはあるの？」

　響花ちゃんが、不意にそんなことを聞いてきました。私が思いつく人物を挙げると、響花ちゃんは、

「……そう」

　と言って、そのまま響花ちゃんは話題をかえました。

　それからこの日は、私へのいじめについては何も触れぬまま、別れたのでした。

　この時、私は気づくべきだったのかもしれません。いや、この時でなくとも、次の日から、響花ちゃんのシャンプーの香りが、香りアザミのパイナップルのような香りに変わっていた時に気づくべきでした。響花ちゃんの様子が、少しおかしかったことに。

「……っ！」

　あれから数日後、朝のホームルームで、私は絶句していました。クラスメート数人が、両腕両足を骨折し入院したと、担任の先生が言ったのです。不良の多い学校なので、怪我して入院するくらい、あまり珍しくないことですが、入院したクラスメートというのが、以前響花ちゃんに話した『心当たりのある人物』で挙げた人たちだったのです。

とはいえ、響花ちゃんは折角できた私の友達。それに、響花ちゃんが不良相手に怪我をさせるなんて考えられません。どうしても響花ちゃんを疑いたくなかった私は、ただの偶然で済ますことにしたのです。

それからしばらくは、特に何事も無く月日は流れ、私はこの事を綺麗さっぱり忘れてしまったのでした。

「ねぇ、響香ちゃん。今日、暇？　暇だよね？　遊びに行かない？」

　とある休日の朝、響花ちゃんからこんな電話がかかってきました。

「五時までなら大丈夫だよ」

「あれっ？　何かあるの？　いつもはもっと遅くまで一緒にいてくれるのに……」

「うん。今日、お母さんの誕生日なんだ。準備しないと。あと、誕生日プレゼント買いたいから、付き合ってくれる？」

「えっ……？」

　最後に響花のそんな声が聞こえましたが、それがなんなのか気になった時にはもう、私は電話を切っていました。

「あれっ？　響花ちゃん。それって前使ってた、ラケナリアのシャンプー？」

　いつもの待ち合わせの場所に行くと、既に響花ちゃんが待っていまいた。近づいたときの香りが、いつもと違っていた事に気がついた私がそう聞くと、響花ちゃんは黙って頷きました。少し悲しそうな顔で、いつもより元気がありません。

「響花ちゃん、プリクラ行かないっ？」

　少し心配になった私は、いつもよりテンションを上げて、響花ちゃんの手を引っ張り、ゲームセンターへと向かったのでした。でも結局、響花ちゃんはこの日、元気のないままだったのです。

目を疑う光景が、写っています。おびただしい熱気が、私の頬を撫でています。自分の家が、燃えていました。

時は、あの休日から数日たった日のことです。学校で私のクラスの数学の先生が、セクハラで懲戒免職になり、私と響花でその話題で盛り上がりながら帰路についていました。すると自分の家のあたりで、真紅の炎が揺れて、何やら騒がしく、嫌な予感がした私は、響花を置いて一人で炎の方へと走ったのです。

後は、前述の通りでした。

私は周りの声が何も聞こえず、今家にいる母の安否など何も考えられず、気がついた時にはもう、真紅に燃える家に入ろうと走りました。誰かが私を抑えよう掴んできましたが、私はそれを払い除け、ただひたすらに、前に進もうとしたのです。ついには、誰かが、見たことのある花柄のハンカチを私の口元に押し付けてきました。すると、私の視界は、次第に黒く……黒……く……くろ……く……。

　気がつくと、そこはどこかのホテルの一室でした。どうやら、私は長いこと眠っていたようです。私はしばらくの間混乱し、状況が理解できず、おそらくはユニットバスルームと思われるところから響花ちゃんが出てきたところで、ようやく少し落ち着きました。

「響……花ちゃん、ここ……どこ？」

　煙にでもやられたのでしょうか？　声が掠れて、うまく出ません。目もおかしくなったようです。響花ちゃんの、いつもはとろんとしている目が、なぜかうつろになっているように見えました。消えるはずのないハイライトもありません。この部屋のぼんやりとした照明のせいでしょうか。響花ちゃんの右手が、キラキラと光って見えます。

「『ラウ・ミラージュ』っていうホテル」

「『ラウ・ミラージュ』……？」

　再び、混乱してきました。『ラウ・ミラージュ』は、ブティックホテルのことです。女性二人で、しかも高校生が泊まっていい場所ではありません。

「響香ちゃん」

　響花ちゃんが、ベッドで寝ている私に近づいてきました。

「死んで、私のものになって……」

　響花ちゃんは私に覆い被さり、耳元でそんな事を囁きます。濡れた髪が、私には色っぽく見えました。

「……えっ？」

　何を言われたのか、私はよく分かりませんでした。掛け布団越しに伝わる響花ちゃんの鼓動が、非常に激しくなっていきます。

「響香ちゃんは、何時になっても私だけを見てくれない……」

「そんなこと……」

「セクハラなんかする数学の先生や、お母さんのこと、見てたじゃない」

　ぼーっとする頭で反論しようとした私に、響花ちゃんは被せるようにそう言いました。

「でも、響香ちゃんは悪くない」

　響花ちゃんが、そう呟きます。

「悪いのは、響香ちゃんを惑わす彼らの方……。それとあなたを傷つける人も……。私はあなたに、悲しい思いはさせない……」

　私は、響花ちゃんが何を言っているのか、分かりませんでした。これほど誰かに説明してもらいたいと思ったことはありません。

「あなたは私のもの……」

　その時、響花ちゃんから、バラのシャンプーの香りと、トリカブトのボディーソープの香りがしました。いえ、トリカブトのボディーソープの香りがしたきがする、というべきです。トリカブトには、香りはありません。ただ、そんな気がしたのです。

「この先、あなたには彼氏ができるかもしれない。大学だって、別々になるかもしれない。そんなこと、耐えられない。考えたくない。あなたと離れたくない……！」

　そう呟き終わると同時に、私の首に、何か冷たく鋭い物が当てられました。キラキラ光っていた右手は、私の視界から消えていました。響花ちゃんが、私をベッドに押し付けます。私に痛みはありません。シーツが乱れ、響花ちゃんは、左手で私の頬を撫でました。

　恐怖が襲ってくるまでに、しばらく時間がかかりました。ベッドに押し付けられているせいなのか、体が動きません。逃げることができません。だんだんと呼吸がしづらくなって、息苦しくなり、頭痛がしてきました。

「……やめて！　響花ちゃん！」

　吐き気を催す直前、やっと出た言葉が、私の最後の記憶です。何か暖かい液体が流れたと思ったら、私の視界が再び黒く……黒……く……くろ……く……。

『今日、午前十時頃。都内のブティックホテルで、女子高校生の遺体が発見されました。警察は、殺人事件として捜査を……」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　【あとがき】

　お久しぶりです。Puney　Loran Seaponです。お楽しみ頂けたでしょうか。

　今回は一応、ホラーを書いたつもりです。一昨年の製本版案山子に、同じジャンルで作品を登校させていただいたのですが、あまり怖くなかったようなので、今回はそのリベンジマッチ第一弾です。またしてもお化けの類を使わず恐怖を描くことにこだわった結果、こんな感じになりました。ヤンデレって、いいですよね。この作品書く時に調べていたら、可愛いと思い始めてしまいました。すいません。妄言なので、忘れてください。それでは、また次回。